Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, *No.7*, pp. 89-102, 2014
信州大学教育学部研究論集　第7号　pp. 89-102　2014年

＜実践報告＞

異校種間の交流活動に求められる「教師のマネジメント力」

草間信一　安曇養護学校
土井　進　信州大学教育学部教育科学講座

キーワード：異校種間の交流活動，教師のマネジメント力

１．はじめに

現在の学校教育では，児童生徒が異年齢集団で縦のつながりを持つ活動を積極的に取り入れるようになった。要因の一つは，日常生活の中で自然に縦のつながりで群れて遊ぶことが少なくなった現状がある。かつてのように子どもたちが群れて遊ばなくなり，ゲームなどでしかつながることができなくなったために，「人とかかわる力」や「高学年が下の学年をリードする力」が衰退したという報告がある。教師がそういう現状を打破するために異年齢で交流する場を意図的に設定することが増えてきているのである。

様々な実践報告では，交流活動によって児童生徒の伸びる姿が数多く紹介されている。しかし，異年齢の交流活動は，うまくいく場合とそうでない場合がある。そのポイントとなるのが「教師のマネジメント力」であると筆者は考える。本稿で用いる「教師のマネジメント力」とは，「学級のねがいを達成するために，学級そのものと学級の児童一人一人の成長を促す教師の働き」を指している。筆者が長野市立通明小学校 6 年生と安曇野市立堀金小学校６年生で実践した保育園児との交流活動における児童の学びの姿を通して，「教師のマネジメント力」の具体像について考察する。

２．長野市立通明小学校６年生での実践（平成 20 年度）

2.1　事前にしておかなければならないこと

長野市立通明小学校６年生の総合的な学習の時間において,「クラスみんなで何かしよう」という話し合いをした。担任からは「ただ楽しいだけの活動にしないこと」,「自分たち一人一人もクラス全体も成長できるようにすること」,「できれば学校の外に出て活動できること」という条件を与えた。子どもたちの興味関心を基本としながらも，教師がねらう目的だけは達成させたいと考えた。何時間も話し合いを重ね，子どもたちは「保育園に行って，小さな子どもたちと一緒に遊びたい」,「特に年長組さんに学校のことを教えてあげて，不安なく入学できるようにしてあげたい」という計画案を決めた。筆者にとっても初めての試みであり，どのように進めていけばよいか皆目見当がつかなかった。子どもたちの中では，「保育園を訪問し一緒に遊べばいい」というイメージがあるようだが，果たして全員が積極的にかかわることなどできるのだろうか。小さい子を苦手としている子だっている

はずである。グループを組ませてみることも一案であるが，人任せにしてしまう子も出てくるだろう。担任として不安ばかりが頭をよぎった。そのことを子どもたちに伝えると，自分たちが作った計画案を保育園の先生方に見ていただき，アドバイスをもらおうということになった。それは良い案だということで代表の子ども 3 名を連れて，学校近くの 5 つの幼稚園や保育園を訪問した。

ところが 1 つの園を除いて全て「お断りします」という回答であった。過去に同じように交流活動を申し込んできたクラスや学校がたくさんあった。たった一度の交流活動で判断するものではないが，担任の先生は「子どもたち任せ」にして何もしない。積極的にかかわる子も中にはいるが，たいていの子は見ているだけであったり，自分たちばかり楽しんで，保育園児にケガをさせてしまうような活動が多かった。小学校の先生方の考えもわかるのだが，園側からすると「交流」ではないという話であった。代表の子たちは，「自分たちは何もしていないのに，なぜやらせてもらえないのか」とショックを受けた。そのことをクラスに帰って報告した時の子どもたちの表情はとても悔しそうであった。

筆者が不安に思っていたことが的中した結果となった。このような交流活動においては，事前の打ち合わせや活動内容についての検討を含めた「教師のマネジメント力」の発揮が非常に大切であると痛感した。それならばきちんとした指導をした上で，過去に例のないような素晴らしい交流活動を創り上げてみせるという決意を子どもたちと共有した。

しかし，この段階で重要な示唆がある。申し込みをする段階で「相手の考えを知る」ことの大切さである。例えばお年寄りとの交流活動を仕組む場合で考えてみよう。お年寄りを一番わかっているのは，現場のスタッフである。そのスタッフのご意見を事前に伺っておくことは，活動を創り上げていく上で大きな見通しを与えてくれる。

2.2　課題を明らかにすること・事実を知ること

幼稚園と保育園の先生方から小学校側に指摘されたことは次の 4 点であった。

ⅰ)担任の先生が子どもたちに任せきりにしないで，きちんと指導すること。

ⅱ)例えば鬼ごっこのように，園児にケガをさせてしまうような活動をしないこと。

ⅲ)個人差があるとしても，極端な話「1 対 1」でも活動できること。

ⅳ)自分たちだけが楽しむのではなく，相手意識をしっかり持つこと。

これらのことを模造紙に書き出し，小グループでこれらの指摘に対して「自分たちに何ができるか」を検討した。園の先生方からのきつい要望を受け止めて，子どもたちは本音で語り始めた。「正直言うと，遊ぼうと言われても何をしていいのかわからないし，喜んでもらう自信もない。どうすればいいのかわからない」，「一緒に遊んだこともない子とどうやって仲良くなるのか自信がない」，「あれもこれもダメだと言われているから，何にも思いつかない」。これらの意見に対して，この活動を誰よりもやりたいと願っていたＹ子が，具体的にどのようにすれば仲良くなれるのかということを力説し始めた。しかし，「Ｙさんはできるかもしれないけれど，実際に全員がそういうことができるとは限らない」，「それができるようになるには，何回も交流活動しないといけない。僕たちが行けるのはたった 1

回しかない。その 1 回を成功させるのは難しいんじゃないか」。話し合いは暗礁に乗り上げてしまった。そこで，教師は交流活動のイメージを持たせることにした。

2.3　「自分がやりたいことのイメージ」と「自分ができること」をつなげる

このような交流活動についての話し合いをするときには，積極的にかかわろうとする子とそうでない子が存在する。積極的にかかわろうとする子は自分なりのイメージを持っている。自分ならこんなことができそうだというイメージである。ところが大半の子は自分の活動をイメージすることができないために，どうしても消極的にならざるを得ない。だとすれば，まずイメージを持つことができている子が，絵や言葉で説明すれば，同じ土俵で考えていくことができるのではなかろうかと考えた。

交流に積極的な Y さんに画用紙いっぱいに絵を描かせ，さらにマジックで説明書きを加えさせた。「私たちの目的は，不安なく小学校に入学してほしいということだから，給食のこととか，先生のこと，勉強のことを実物を使って説明すればいい。例えば実際の教科書を見せたり，ランドセルを背負ってもらったり･･･」彼女の説明を聞いていた他の子たちは，自分なりのイメージを持つことができた。その後意見が活発に出された。

「人気のある給食メニューの写真を撮って見せたらいいと思う」，「ランドセルの軽いバージョンとすごく詰め込んだ重たいバージョンを持って行って，実際に背負ってもらえばどうだろう」，「プールを怖がっている子もいるだろうから，段ボールみたいなので実際の深さがわかるように作って，深さがこれくらいだと体験してもらえばいいと思う」，「ただ発表するみたいにするとつまらないから体験コーナーみたいにする。そうしたら，6 年生も遊んでしまう人がいなくなる」，「先生にも登場してもらって，入学までに身につけたいことを話してもらうといい」。Y さんのイメージを聞いて，自分ができることをイメージできた子どもたちは，積極的に意見を出し始めた。たった 1 回の交流活動であるので，個人個人が勝手に遊ぶのではなく，クラスとして発表形式としてのまとまりを持たせると共に，体験コーナーを取り入れるなどの工夫も取り入れることが確認された。

2.4　グループで活動させる意味

交流の形が決まったので，次は何を発表するのか，何を体験してもらうのか，という話し合いを進めることにした。はじめにグループを決めてから内容を決めさせるのか，それとも内容を決めさせてからグループを作るのかという点も大事である。前者であれば，クラス内の人間関係を重視し，この人間関係ならうまく活動できるだろうという教師側の配慮が必要である。後者であれば，内容重視の活動となる。6 年生であれば後者で行わせたい。よく「好きな人同士でグループを組んでも良いか」と子どもたちに聞かれる。クラスとして目的に向かって活動する時には，たとえくじ引きで決められたメンバーでも計画準備や運営ができるように，普段の生活において経験を積ませておきたいものである。

クラスとして決まった内容は，「勉強のこと」，「給食のこと」，「先生方のこと」，「歩いて登校しよう」等であった。自分ならどの活動に参加できそうかという観点でグループを決めた。そうやってできたグループがたまたま仲良し集団になることもある。しかし，普段

から鍛えられているクラスであれば「男女のバランスが良い方がいい」,「いっそのことくじで決めよう」という意見も出てくるものだ。目的は「仲良し集団で活動を創り上げること」ではなく,「園児のために自分たちで協力して活動を創り上げること」だからだ。「教師のマネジメント力」のポイントはその点をしっかり押さえておくことである。

1つのグループの人数は 5 人を超えないことが望ましい。どうしても人に頼ってしまったり，任せきりになってしまったりする。今回は 4 人で組んだ。すでにイメージができているので，ここからは子どもたちのアイディアを大切にしていけば良い。「○日後のこの時間にリハーサルをやるから，それまでに完成させるんだよ」と期限を与え，後は必要な材料を用意したり，相談に乗るくらいで良い。口出しは極力しない。これも大切な「教師のマネジメント力」である。

2.5　リハーサル時の指導のポイント

まずは教師1人で子どもたちの発表を見る。「声の大きさ」,「目線」,「立ち位置」といった基本的なことだけを指導する。内容については指導しない。一通り終わったら，今度は全員の前でそれぞれのグループが発表し合う。ここでは，内容についてのみ意見交換をする。先ほどの教師の指導に関することは一切出さない。最終的な目的は「園児のため」という部分であるので，その目的に合致しているのかどうか，園児目線で意見を出し合うのである。具体的に1つのグループの様子を紹介しながら考えてみたい。

そのグループは「学校の先生のこと」を紹介することになった。小学校の先生の写真を撮り,「○年○組の先生で，こんな先生です」のようなコメントを付け加えていた。コメントそのものは工夫されており，例えば「理科の先生です。学校で一番大きな先生で，鳥の研究をしています」のような内容である。そのようにして 10 人ほどの先生が紹介された。その発表を聞いていた他の子どもたちから次のような意見が出てきた。

「もしかしたら園児が入学する時には，この先生たちがいないかもしれない。だとしたら個人的なことを紹介しても意味ないんじゃないか」,「一番気になるのは，どの先生が担任になるのかということだと思う。でもそれは入学式までわからないから，ここで紹介してもしょうがない」,「僕は学校に入った時に，男の先生が多くてびっくりしたし，いろんな先生がたくさんいることにびっくりした。名前とか特徴とかより，こんなことをする先生がいるよ，みたいな発表でいいと思う」。

こういった意見を参考に，また各グループで相談させていく。この繰り返しでより良いものが自分たちの手で創られていく。

2.6　司会進行のポイント

全体の場で説明したり，あいさつをしたりする時に，代表児童という存在が必要になる。教師が行うことも可能であるが，できれば子どもに任せてみたい。園児が注目するのは表情や動作である。声が大きく，臨機応変に対応できる子どもを選出したい。司会進行だから原稿メモさえあれば誰にでもできるという考え方では目的が達成されないことが多い。また「～です」「～ます」という丁寧な言葉と一緒に，相手に合わせたしゃべり方を指導し

ておきたい。今回はクラスからの推薦でK児が選ばれた。声が大きいこと，しゃべるときに動作が大きいこと，臨機応変に対応できることなどがその理由であった。実際にK児がしゃべった言葉を紹介したい。

「〇〇保育園のみんな！　こんにちは～！　通明小学校のお兄さんお姉さんたちだよ～！あれれ，なんだか元気がないなあ。もう一回あいさつしようか。こんにちは～！」,「こんにちは～！」。彼はここで後ろにのけぞり，転ぶ仕草をする。「わあ，元気だねえ。今日は，みんなに学校のことを教えに来たよ」といった感じである。たったこれだけのセリフやパフォーマンスで園児の注目を一身に集めることができた。場合によっては事前に教師が見本を見せ，イメージを持たせたい。

2.7　当日の教師の動き

各グループの発表が始まる。中には練習よりも声が小さかったりして，ねらい通りの動きをしないグループもある。そこでの教師の対応次第で子どもたちが伸びるかどうかが変わってくる。

あるグループは持ってきた写真のパネルがバラバラになってしまい，ステージの前でバタバタしてしまった。さらに焦ってしまったのだろうか，お互いを責め合うようなことを始めてしまった。園児は退屈そうにしているし，周りのグループの子は「しっかりしろよ」という視線を送る。良くない雰囲気である。そういった場合に教師はどのように動くのか。一つの対応は（園児の前でもあるので）「黙って見ている。後で厳しく指導する」という方法であろう。しかし，たった 1 回の本番で次の活動がない時には，いくら厳しく指導したとしてもその後に子どもたちの成長は見られない。自分たちがやってきたことが否定され，何も達成感もないまま終えてしまう。もう 1 つの対応は，その場で指導することである。子どもたちは園児の前で指導されると，かえって萎縮してしまい，その後に大きく変化することはない。多くの場合は，これら 2 つの対応をとってしまい，後味の悪い交流活動になってしまうのだが，ここでは，第 3 のやり方を紹介したい。一通り発表が終わってから，教師が登場するのである。

「ごめんね。このグループはすごく上手に発表できるんだけど，今日はちょっとトラブルがあったんだよ。後からもう 1 回やってもらうからね。いいかな？」

こうすることで，本人たちにはもう一度チャンスが生まれるのである。短時間で準備をし直し，打ち合わせを行い，たいてい素晴らしい発表ができる。場合によっては発表の途中でストップさせる勇気も必要である。もしやり直すチャンスがない場合であれば，全体の場で同じようにフォローしておくことが大切である。

さて，このクラスの発表は，園児に大変喜ばれた。小学校に対する不安が大きな期待に変わったようだ。さらに嬉しいことがあった。この訪問の噂を聞きつけた他の園から「こちらにも訪問してもらえないか」と依頼がきたのである。「先日は，よくよく話も聞かずに断ってしまって申し訳ありませんでした。〇〇保育園の園長先生から話を聞きました。大変素晴らしい訪問であったということで，本当に申し訳ないのですが，来ていただくこと

はできないでしょうか。ぜひお願いします」という電話の内容であった。このことを伝えると，「ヤッター」，「ウォー」という声にもならない喜びを子どもたちは発していた。卒業前の忙しい時期ではあったが，その後２つの園を訪問して有終の美を飾った。１つの園では園長先生がその時の様子をＤＶＤにしてクラスにプレゼントして下さった。訪問を終えた後，学校に戻ってくる時の充実感，クラスとしての連帯感は，格別のものであった。ここで児童の感想文を紹介したい。

「僕たち６年５組は，地域の人の役に立つ活動をしようと，保育園の訪問をしました。今度 1 年生になる年長さんに，学校のことをいろいろ教えたり体験してもらって，不安なく入学してもらえるようにいろんな工夫をしました。僕は 1 年生の時にランドセルがとにかく重くて毎日大変だったし，歩いて登校するのが辛かったけど，それを続けてきたら体力もついたし，6 年間で中国に行くくらい歩いたってわかったから，そのことをどうしても伝えたかった。僕のランドセルにいっぱい荷物を詰めて保育園の子に背負ってもらったら，後ろにひっくり返ってしまった。でも『すごいなあ。こんなに重いの毎日持つの？』と言ってくれた。それから 6 年間で中国に行くくらい歩いたんだよと，地図を見せながら教えた時の驚いた顔がうれしかった。司会をしていたＫ君はおかあさんといっしょのお兄さんみたいだったし，グループのみんなでも協力できた。保育園の先生にも喜んでもらえた。苦労して本当によかったと思う。６年間で最高の思い出になりました。帰り道に，先生がごほうびだよと言って公園で遊ばしてくれたのもラッキーでした。さらに最初に断った保育園と幼稚園からも来て下さいって言われたので，本当にすごいことをやったんだなあと思いました。クラスのみんなのおかげだと思います。中学校では職場体験があるそうです。僕は保育園になんて行くつもりはなかったけれど，今回の経験があるので，保育園にも行けそうです。自信がつきました。」

2.8　ついた力の自己評価

さて，このような交流活動で大事にしたいことが自己評価である。この自己評価を教師がどのように仕組んでいくかによって児童の学びが大きく異なってくる。まず児童には感想文を記述させるとともに，「この活動によって『ついた力』は何ですか」という質問をする。あまり馴染みのない質問であるので最初は戸惑うことが多い。それでも，なんとかこじつけてもいいから３個程度書くように促すと次のようなことが出てくる。

〇発表する力　〇相手のことを考える力　〇協力する力　〇喜んでもらう力

ここからが「教師のマネジメント力」の大事なポイントである。ここに記入された内容をさらに詳しく肉付けしていくのである。そして、発表できそうな子を指名する。

Ｔ1「では，発表してください」

Ｓ1「ぼくは『発表する力』がついたと思います」

Ｔ2「もうちょっと具体的に説明しようか。どんな場面でどのような発表したのですか」

Ｓ3「保育園の子にランドセルの重たさを説明する場面で，実際に重たいのと軽いのを背負ってもらったり，歩いてもらったりして，相手に伝わるように発表することができま

した」

Ｔ4「ちょっとまとめると，言葉だけじゃなくて具体物を使う工夫をして，相手にわかりやすく伝える力，って感じかな？」

Ｓ5「わかりやすくっていうか，相手のことを考えて，かな」

このように全体の場で数人とやりとりをする。そして「今のように，自分が書いた『～の力』を詳しく説明してください」と指示する。

こうして再度考えることによって自分についた力がより明確になるとともに，学級全体の場で発表することで，相互理解が深まり学級としてついた力も実感される。また，筆者の場合はこの結果を教室に掲示するようにした。

掲示することで，自分たちには，こんな力がついたんだと実感できるとともに，次はこうしていこうという具体的な目標を持つことができるであろう。評価は「次につなげる」ことを意識して行う。友だちの考え方を知ることも評価活動で大切にしたい内容である。

相手の実態に合わせて，伝える力。	19 名
目的に向かってグループで協力する力。	14 名
友だちに具体的なアドバイスをする力。	11 名
友だちの良さを発見する力。	8 名
友だちやグループの良さを取り入れる力。	8 名
方法を駆使して相手に喜んでもらう力。	5 名
礼儀正しく接する力。	4 名
次もがんばりたいと思える力。	3 名

【あなたはこの交流活動を通してどんな力がついたと思いますか】アンケート記述者 27 名（複数回答）

３．安曇野市立堀金小学校６学年での実践（平成 24 年度）

3.1　活動に連続性を持たせる

交流活動は児童生徒の関心やねがいからスタートして決めることが望ましい。本学級では，実行委員会を立ち上げ，委員がアンケートを取りながら話し合い活動の中心となって活躍した。結果として総合的な学習の時間に「保育園との交流」を行うことが決まった。前述の事例と異なり，近くの保育園は快く訪問を受け入れてくれた。ただし，園長先生から「来てくださるのは嬉しいですし，園児も確かに喜びますけど，小学校の立場で考えたら『ただ訪問して一緒に遊ぶ』だけでいいのですか」と示唆をいただいた。

数年の間に小学校の複数クラスが訪問にやってきたのだという。いろいろな方法で交流活動が行われた。しかし「また来て欲しいな」という声が園児から聞こえてこない。つまり活動がその場で終わってしまっているという印象を園長先生は持っておられるのであろう。園児ですらその場限りと思っている状態では，小学生も中途半端な気持ちで交流活動を終えているのではないだろうか。園長先生に正式に訪問を申し込む時には「年長さんを対象として，学期に 3 回，1 年間で 10 回前後の訪問をお願いしたい」と伝えた。

これは担任にとって大きなプレッシャーである。もしかすれば途中で「もう来ないでください」と言われるかもしれない。子どもたちの意欲を 1 年間持続させるための工夫も必

要である。ここに「教師のマネジメント力」が試される。

3.2　交流活動の見通しを持たせる

実行委員に「年間 10 回の交流」を伝えた。そして「もしかしたら途中で中断されてしまう可能性があること」も伝えた。数回の交流活動を予想していた子どもたちの肩に大きなプレッシャーがのしかかった。話し合いをさせたのだが，なかなかアイディアが浮かばないものだ。たった 1 回の交流活動ではなく継続して行うことという条件は子どもたちにとって大きな負担にもなったのであろう。「3 学期に小学校の生活のことを教えてあげたい」，「絵本の読み聞かせをしたい」，「ゲームコーナーを作って楽しませたい」，「鬼ごっこをしたい」･･･出てくる意見に統一性はなく，話し合いは暗礁に乗り上げかけた。1 回ならばすぐ決まることも，年間 10 回の交流活動の内容を企画することは思ったより難しい。教師には，このような場合，子どもたちに新しい視点を与えることが求められる。

・同じ内容を繰り返し行っても良い。園児は楽しい内容ならばまたやりたいと思うはず。例えば，1 学期に行う内容は全部同じでもいい。
・園児と直接触れ合うのが得意な子もいれば苦手な子もいる。全員に同じことを求めてはいけない。クラスみんなで交流を成功させればいい。

こうして実行委員は 1 学期に縁日タイプの「遊び広場」，2 学期に園児がいろんなことにチャレンジできる「チャレンジピック」，3 学期に小学校のことを伝える「もうすぐ 1 年生」という 3 つの柱を計画した。

3.3　自己評価に活かすグループ活動

通明小学校の実践とは違い，長期的な交流活動になることから，振り返りの場がより大切である。本学級の場合は，この交流活動を通して学級作りをしていきたいという担任の願いがあり，そのために「友だちの良さを再発見する」，「固定された人間関係を打破する」ために意図的なグループを組むこととした。具体的には 6 年生児童と園児の 1 対 1 のペアを作り，さらに 6 年生 2 名と園児 2 名という 4 人グループを組ませるのである。そして，この 4 人で常に行動させていくのだ。児童には事前に「相手の行動や言葉で良かったと思うことや気づいたことを後でカードに書く」ということを知らせておく。活動はおよそ 1 時間。自分が相手をする園児の相手をすると同時に，同じグループの 6 年生の様子も観察していかなければならない。

どのように 6 年生 2 名を組み合わせるのかという点も大事である。この組み合わせは毎回替えていくのだが，6 年生の場合，男女という組み合わせが一番良い。はじめは照れくさがっているとしても，目の前には園児がいる。照れている場合ではないのだ。園児への接し方も男女では違う。ペア学習により，そういったことに気づくこともできるのだ。

3.4　他者からの評価を効果的に

学習カードには「今回の自分の目標」，「活動を振り返っての自分の感想」，「ペアの子からの感想」，「先生から」を記述できる簡単なものを用意する。活動後に各自が記入し，全員分を廊下に掲示する。担任は全てにコメントを入れるのだが，個々の目標に照らし合わ

せての評価と，良かった点を箇条書きで書く。廊下には交流の様子の写真を模造紙に貼り，他のクラスや先生方，お家の方にも見ていただけるようにしておく。交流を重ねるごとに張り出すので廊下はごちゃごちゃしてしまうのだが，活動の連続性がわかるし，自然と学級以外の目からの評価が入ってくる。これが子どもたちの大きな自信となるのだ。

3.5　「交流活動の繰り返し」をどのように仕組むのか

1学期に計画した「遊び広場」では次のようなコーナーが計画された。

〇水中生物とふれあうコーナー（近くの川で捕まえてきた生物を観察できる）
〇記念の手形コーナー（飾り枠の中に園児の手形をとる）
〇ボーリングコーナー（ペットボトルを使ったボーリング）
〇ぴかぴか泥団子コーナー（本格的な泥団子作り）
〇読み聞かせコーナー（厳選した絵本の読み聞かせ）
〇サッカーコーナー（PKで園児と勝負）
〇宝探しコーナー（時間内に宝を見つける）
〇射的コーナー（割り箸鉄砲の作り方を教え，射的で遊ぶ）
〇どんぐりごま体験（どんぐりでコマを作る）
〇釣りコーナー（磁石で釣り上げる釣り遊び）

全員のイメージを共有させるために毎回の計画は模造紙に図を入れながら記入する。それを担任がチェックする。活動を終えるとその模造紙に別の色で「次の活動はどうするのか」を記入させていく。繰り返しの活動の場合，どうしてもマンネリ化してしまったり，意欲の低下が懸念される。

Ｓ児は，サッカーグループの責任者である。第1回目の交流活動は好天に恵まれ，外で思い切り園児と楽しんだ。行列ができるほど好評であった。交流活動を始める前に各グループからの30秒デモンストレーションを行ったわけだが，Ｓ児は「絶対サッカーがうまくなるからみんな来てね」とポーズまで決めて発表した。その効果もあったのだろう。Ｓ児はその日の学習カードに「僕たちが準備をしてきたサッカーコーナーで，みんなが喜んでくれたので良かった。特に何度も挑戦してくれる子たちがいっぱいいて，いい企画をしたなあと思った」と記述した。ペアのＫ児からも「Ｓ君はボールのけり方をわかりやすく教えていたね。ボールの中心を見ることや，左足の置き方を説明しているのを聞いて，私も参考になりました」と書いてもらっていた。

Ｓ児はそれで安心してしまったのだろう。2回目の準備をほとんどしなかった。担任から指摘されると「大丈夫。だって1回目の俺たち見たでしょ？　ばっちりだって」と軽く受け流していた。そして2回目の交流活動。あいにくの雨で室内で行うことになった。Ｓ児のやったことは前回とほぼ同じであるが，やってくる園児の数は激減した。他のグループは前回よりもデモンストレーションを工夫し，それぞれのコーナーについても工夫をしている。園児がそちらに流れてしまったのだ。

Ｓ児はその日の学習カードに「完全に油断した。同じことをやれば楽勝だと思っていたけど，そんなに甘くなかった。他のグループみたいにもっと工夫すればよかった。今日はつまらなかった」と記述した。Ｓ児は次の交流活動のために他のグループが準備をしている場面を見学に行く。そして景品を作っているグループを見つけて「俺たちも景品を作ろう」と呼びかける。しかし，グループのメンバーから「同じようなこと（景品を作ること）をしたってしょうがない。それよりも中身で勝負しよう」と諭された。

Ｓ児たちは議論を重ねた上で次のような結論を出した。それは「本気」でＰＫを止めるということである。今までは園児に対して「シュートを決めたら喜ぶだろう」と思い，かなり手加減をしてほとんどの子にシュートを決めさせていたのである。ところがＳ児はデモンストレーションで「俺は堀金で一番うまいキーパーだ。どんなシュートでも絶対に止めてみせる。チャレンジしたい人は何度でもやってくれ！」と宣言した。その宣言通り，Ｓ児は本気でシュートを止め続けた。確かに女の子の中にはうまくいかずに１回のチャレンジで終了した子もいる。しかし、悔しくて何度も何度もチャレンジする男の子たちがいた。Ｓ児は時間いっぱい本気でシュートを止め，ついには１点も入れさせなかったのである。終了時に「俺，こんなに疲れたのは初めてだ･･･」とつぶやき，その場で大の字になって寝ていた。お別れの時間になるとたくさんの園児がかけよってきて「また今度やってね」，「また挑戦したい」と握手を求めてきた。Ｓ児は「今日は一番疲れたけれど，一番頑張ったと思うし，本気で止めるという作戦もうまくいった。本当にやってよかった」と記述した。ペアのＹ児からは「Ｓ君が本気でシュートを止めていたので，園児が泣くかと思ったけど，何度も挑戦しているのを見て，景品を出すよりもいいことを考えたなと感心しました」と書いてもらった。Ｓ児は１学期のまとめに「相手のことを考えたり，相手に喜んでもらうということは奥が深い。時にはこっちが本気になって挑戦してもらうことが喜んでもらえることになることがわかった。2 学期もいろんな方法を試してみたい」と書いた。

2 回目の準備の時に「このままじゃダメだ。もっと考えなさい」と教師が指導していたとしたらどうだろう。S 児にとっては 2 回目の失敗がその後の大きなエネルギーとなっていることがわかる。活動を繰り返すことは，児童にある程度の失敗を経験させる意味でも，教師が長いスパンの中で子どもたちを指導することができる意味でも，どっしりと構えて取り組むことができる方法である。

3.6　見る目を育てる

児童の感想文や相互評価には回を重ねるごとに同じ内容の羅列になってしまう児童が出てくる。「優しく声をかけていたのでよかったです」，「会話がなくなったときにいろいろ質問していたのが良かったです」など。当日の教師の動きにも関係してくるが，教師は全体の様子を把握しつつ，「いいな」，「紹介したいな」と思う場面をカメラで撮ったり，会話の様子をメモしておく。交流後にスライドショーを作成し全体の場で紹介する。また学習カードに書かれた印象的な言葉を模造紙にまとめるとともに，どういう点が良かったのかを記録していく。学級通信でも紹介していく。子どもたちはこういった情報から「友だちを

見る新しい視点」を獲得していく。

【１学期に模造紙に書かれた内容】　　【２学期に変化していった点】

・優しく声をかけていた。　　→園児の目線の高さに合わせてしゃべっていた。

・「すごいね」と褒めていた。　　→うまくできた時にハイタッチで盛り上げていた。

・〇〇をやろうよと誘っていた。　　→園児に希望を聞いたりしながら誘っていた。

・わがまま言われても我慢した。　　→これはいけないよと優しく注意をしていた。

１人の子が気づいた「友だちの良さ」を「次に活かす視点」として，クラス全体に広げていく。これによって友だちを見る目が飛躍的に育っていく。そしてたくさん紹介された姿の中から「これなら自分でもできそうだ」と感じ，次の交流活動に生かしていく姿が多く見られた。

3.7　MVP の紹介

交流活動が軌道に乗ってくると，活動そのものは大きく修正することもなく子どもたちも意欲的に準備を進めることができる。いよいよ「学級を育てる」という段階に入る。具体的には普段の学校生活であまり目立っていない子を全体の場で紹介していくのだ。交流活動の時には教師がその子たちに特に注目し姿を追っていく。

H 児はどちらかというと控えめで同年代の子と遊ぶ時にはいつも一歩後ろをついていくことが多かった。不器用な面もありなかなか認められる機会も少ない。ところが保育園児との交流では積極的に関わる姿が多く見られた。H 児の姿をよく見ていると，園児がちょっとでもできるようになったことがあると必ずハイタッチをしていた。5 回目の交流時には 90 分の交流時間になんと 35 回もハイタッチをしていたのだ。また，自分のことを親しみを込めて「メガネのお兄ちゃん」と呼ばせていた。H 児がハイタッチしている姿を写真に撮り，交流後にクラスで紹介した。すると「H 君，すごいじゃん」，「今回の MVP だよ」という声が子どもたちの中から出された。すかさず担任が「例えば保育園の子が何かできたとしたら，どんなふうに声をかけてハイタッチするの？　ここでやってみてよ」と H 児に促す。H 児は照れながらもやり方を説明した。「まあまあできたときには自分がしゃがんでハイタッチをする。すごいなと思ったら一緒にジャンプしてハイタッチするんだ」。この後，H 児の姿を参考に，なかなかうまく関わることができない女子がハイタッチを多くするようになった。一人の子の姿が全体に共鳴して広がったと言えよう。

T 児はすぐに「面倒くさい～」，「無理～」と口に出すことで周りの子から距離を置かれていた。しかし，実際はそれが口癖だけで真面目にコツコツと努力する子であった。4 回目の交流活動でT児は保育園の先生からも「あの子はちょっと大変です」，と言われていた園児とペアを組むことになった。ペアが発表されるとその子はすぐに教室から飛び出してしまった。あわてて追いかけるT児。追いかけっこが 30 分続き，やっと手をつないだかと思うと今度は座り込んで動かない。T児は辛抱強くその子の横に座り話しかけ続けた。「あれやろうよ」，「おもしろそうだよ」と誘い続けるが一向に動かない。T児は誘うことをやめ，ジャンケンをしたりなぞなぞを出したり，ドラえもんの話をし続け，交流時間は終了した。

「大変だったね」と声をかけると疲れきった様子で「うん」と頷いた。終わりの会で保育園の担任の先生が「今日楽しかった人」と聞くとT児のペアの子は何も反応しなかった。T児はがっかりした様子であった。ところが，いよいよ交流を終え教室から退場する時「バイバーイ」，「また来てね」と笑顔で別れるその場でT児のペアの子がK児のもとに走ってきたのだ。「お姉ちゃん。行っちゃヤダ。ぼくと一緒に給食食べよう」。教室に戻り交流の振り返りをするとT児の話題でもちきりになった。「今日のMVPはTさんに決まりだよ」，「90分頑張ったんだよね」，「俺ならあんなことできないよ」。T児の「面倒くさい～」，「無理～」という口癖はその後も続いたが，明らかにクラスの子との距離が縮まった。

MVPを設定することは特定の子を評価し，その子を学級の中で位置づけるだけでなく，その結果として学級全体を成長させる意味合いもある。

3.8　ドラマを逃さない

交流活動を続けていると思わぬ場面に遭遇することがある。子どもたちが普段と違う動きをしていたり，雰囲気が違うと感じる時を逃さないようにしたい。

【D君の仲介による仲直り】

ある時，園庭にペアでもないグループでもない子たちが集まっていた。遠くから見守っていると交流活動をしていたクラスではない年中組の子が泣き出してしまった。あわてて担任が駆け寄ろうとすると保育園の先生が手でストップの合図をした。「大丈夫です。子どもたちに任せてみましょう」と言うのだ。後で話を聞くと，園児同士でトラブルがあったようだ。それを見ていた6年生がお互いを仲直りさせようとしていたというのが実情であった。写真はその時の様子である。D児は「この写真だと俺が園児を泣かしているみたいじゃん」と不満をもらしたが，一緒にいた児童たちはD児の行動に対して最大限の評価をしていた。「D君がけんかしている子を見つけて『かわいそうじゃん。仲直りさせようぜ』と言ったのにはびっくりした。先生に任せとけばいいのにと私は思ってしまったから。D君は『あの子が使っていたおもちゃを取り上げたのがいけなかったんだよ』と優しく言っていたし，仲直りのやり方が上手だなと思いました」，「まさかD君にあんな行動力があるなんて。私は泣いている子を慰めようとしただけなのに，D君は仲直りをさせようとしていたのがすごいです。しかも仲直りのさせ方が上手でした。私たちが交流活動していた年長さんじゃなくて年中さんのことも気づくなんてすごい。」

担任が交流活動において為すべきことは，「事故や怪我を起こさない安全管理」が第一であり，その他は「児童理解」につきると筆者は考えている。

3.9　ついた力の自己評価

全ての交流活動を終えた後に自己評価を行った。もちろん毎回カードに記述してきたわけで，最後のまとめは「この交流活動によって自分にどんな力がついたと思うか」，「クラ

スはどのように成長したと思うか」という項目に絞って記述した。この 2 点は，担任が交流活動前に描いていた目標そのものでもある。つまり交流活動を通して「一人一人の成長」を実現することと，「学級としての成長」を達成することである。事あるごとに「自分たち一人一人が成長しようね」，「このクラスとしても成長しようね」と声かけをしてきたことは，大事な「教師のマネジメント力」であったと思う。

優しさ	28 名
相手のペースに合わせる我慢の力	23 名
相手の良さを見つける力	20 名
友だちの良さを真似する力	15 名
相手に喜んでもらう力	12 名
小さい子を思いやる力	11 名
グループで協力する力	10 名

【あなたはこの交流活動を通してどんな力がついたと思いますか】
アンケート記述者 34 名（複数回答）

多くの人が相手のことを考えた行動ができるようになった	25 名
言葉遣いが良くなるなど，みんなが優しくなった	18 名
雰囲気が良くなった	14 名
クラスがまとまった。団結した	12 名
男女の仲が良くなった	11 名
1 年生との交流でもうまくできるようになった	10 名
友だちの良いところをみんなが見つけるようになった	10 名

【この交流を通して，このクラスはどのように成長したと思いますか】
アンケート記述者 34 名（複数回答）

通明小学校とはついた力に違いがみられる。この要因としては，交流活動が年 1 回であった通明小の実践と通年で 10 回行った堀金小の実践の違いによるものと考えられる。ここでＴ児の作文を紹介したい。

「私は小さい子が苦手でした。言うことは聞かないし，疲れるし，何でこんなことやらなきゃいけないんだろうと正直思っていました。1 学期にやった遊びコーナーの 3 回目で，私のペアの子が初めて手をつないでくれました。ちっちゃい手でとてもあったかかかったです。その時から保育園の子ってかわいいなとちょっと思い始めました。自然にハイタッチができたり自分から「おんぶしようか」と言えたのもびっくりしました。ところが 2 学期。私のペアの子は大変でした。ずっと逃げ回っていたし，止まったと思ったら「イヤだ」と言って動こうとしないのです。私は「こっちのほうこそ嫌だよ」と思いました。でもクラスのみんなも頑張っていたし，私だけ諦めるのは嫌だなと思ったので，ずっと話しかけました。保育園の先生が「今日楽しかった人」と聞いたとき，私のペアの子は手を挙げませんでした。私はがっかりしてしまいました。先生が「あの子は手を挙げてくれなかった

けどKさんの頑張りは先生が一番よくわかってるよ」と言ってくれました。ところがです。いよいよバイバイと言っている時にその子が走ってきて「帰っちゃヤダ。一緒に給食食べよう」と言ってくれました。気持ちって通じるんだなと思いました。１年間でいっぱい交流したけど，このときのことが一番嬉しかったです。みんなからもＭＶＰだよと言われて嬉しかったです。私にとってすごい自信がついた交流でした。」

４．まとめ

①交流活動においては，教師は子ども一人一人にどんな力をつけたいのか，どんな姿を期待するのか，また，学級全体をどのような位置まで成長させていきたいのかという明確な「ねらい」をもち，「教師のマネジメント力」を発揮することが求められる。

②「子どもたちの力を信じて見守る」ことができるのは，事前に「教師のマネジメント力」を発揮して，子どもたちがこのくらいまではやるだろうという自信を持てるようになるまで指導してからのことである。予想以上に子どもたちが動いたときに，大きな転機が訪れる。

③教師は安全管理に最大限の注意を払い，全ての責任を負う覚悟をもって活動に参加する。活動の全てを 100 とするならば，80 を教師の力で，20 を子どもたちの力で行う。これではあまりにも教師主導ではないかという批判もあるだろうが，あくまでも子ども主導でありながら力強く支えていくというイメージである。そして，成果については 100 を子どもたち，0 を教師というスタンスにしたい。成功は全て子どもたちの手柄であり，失敗した場合は教師が全責任を負う。子どもたちには安心感を持って活動させたい。教師はあくまでも裏方に徹したい。これこそが「教師のマネジメント力」であると考える。

文　献

小林茂（1966）『ソニーは人を生かす』,日本経営出版社

寺沢宏次（2001）『子どもの脳に生きる力を』,オフィスエム

門脇邦弘（2002）『甦れ！生きる力～飽食の現代に「生き生き村」の挑戦』，木本書店

草間信一・土井進（2012）「「語り」が育む子どもの人間関係―卒業前に行われた「希望の会」の実践から―」,『信州大学教育学部研究論集』第 5 号,pp.233-240

土井進編著（2013）『「信大 YOU 遊」地域・子どもたちと共に歩んだ 20 年』,信州大学教育学部,全 94 頁

（2013年10月10日　受付）
（2014年 2月13日　受理）